

小児看護学における「語り」の授業での学生の学び

中野 幸子*

星ヶ丘厚生年金保健看護専門学校

本研究は、「語り」の授業により看護学生の子どもに対するコミュニケーション能力を高めることを目的として、3年課程の2年次の看護学生を対象に「語り」の授業を実施し、授業後に実施した自由記述のレポートから、学びの内容およびその効果を明らかにしようとした。レポートは最小の文脈に区切り、4つのカテゴリに分類した。最も多くの文脈が分類されたカテゴリは、「語りを実施しての思い」(40.0%)であり、次いで「学びと願望」(29.8%)、「話の創作」(12.6%)、「仲間の語りを聴いて」(12.4%)であった。各カテゴリにおいて最も多い内容は、「語りを実施しての思い」では『難しい』(82.4%)、「学びと願望」では『感情を込める』『引きつける』(24.3%)、「話の創作」では『悩んだ』(70.5%)、「仲間の語りを聴いて」では『もっと聴きたい』(87.5%)であった。これらの結果より、学生は、子どもをイメージし子どもにわかりやすく伝えることができる言葉や話し方、さらに話の内容をとて難しく感じながらも、話し手聞き手の両者の体験をすることにより、子どもとの好ましいコミュニケーションとなる具体的な表現の方法を学ぶことができたことが示され、学生が子どもとのコミュニケーション能力を高める上で「語り」の授業が効果的であることが明らかにされた。

キーワード：語り・コミュニケーション・表出・体験学習・小児看護学

1. はじめに

看護は、人と人との関係が基盤にあり、看護はコミュニケーションそのものだといってもよい。言語によるコミュニケーションでは、相互に伝え合う活動を行う場合、話し手と聞き手の関係は、常に「表出」「受容」「統合」という三つの過程が繰り返されているといわれる。即ち、人は、相手の働きかけ「表出」のなかに生じている表現の意味を「受容」と同時に思考し理解しようとする。そして、思考即表出となるわけではなく、その過程では脳の働きとして聞いた内容が理

解され、認知され、「統合」され、調整されていき、その結果が表出言語として相手に伝えられていく[1]。

この話し手の「表出」が、受け手である子どもにとって複雑ではなく子どもの成長発達を即した「表出」であればあるほど、言語によるコミュニケーションの三つの過程は円滑にすすみ、子どもとのコミュニケーションは好ましいものになると考えられる。

ただ、いうまでもなく言葉によるコミュニケーションだけが人の表現活動のすべてではないが、看護の多くの場面では言葉による「表出」より「受容」としての傾聴が求められ、言葉による「表出」が訓練される場は少ない。また、小児看護学実習の臨地の場でみる看護学生の子どもとの関わり方を見ていると、観察的で受容的な傾向があると感じてきた。

そこで、子どもとのコミュニケーションで、言葉における「表出」の機会が少ない看護学生に「語り」の授業を取り入れた。「語り」とは、「物語、お話しを覚えて語って聞かせること」で、「語り」の授業は、乳幼児期の子どもを対象にクラスの仲間を子どもに見立て、

Sachiko Nakano:
Study on "Story Telling" by Student Nurses in
Pediatric Nursing Class.
Human and Environment Vol. 1 (2008)

*星ヶ丘厚生年金保健看護専門学校, 大阪府枚方市星丘
4丁目8番6号

受付: 2008年8月28日(受理)

C2008 大阪信愛女学院短期大学

事前に伝えておいた課題を仲間の前で語るというものである。想像力や感情移入力、表現力が求められる「語り」の授業により、学生が、対象（乳幼児期の子ども）をイメージし子どもの成長発達をわかろうとしたり、子どもを引きつけ感動を与えられるお話を考えたり、それを子どもにわかりやすく伝えることができる言葉を選び表現することで、子どもとのコミュニケーション能力が高められるのではないかと考えた。

本研究は、「語り」の授業により看護学生の子どもに対するコミュニケーション能力を高めることを目的として、3年課程の2年次の看護学生を対象に「語り」の授業を実施し、自由記述のレポートから、学びの内容およびその効果について分析した。これまでに、絵本という媒体を通して読み聞かせした授業についての研究はなされている[2,4]。しかし、本研究のテーマは「絵本」ではなく、「語り」であり、「語り」についての研究は見あたらない。絵本は言葉のイメージを絵が助けてくれるが、語りはなににもない。自己の「表出」だけである。特に本研究では、コミュニケーションの過程で「表出」するときには得られる学びに視点を置き、子どもをよく理解できない看護学生が「語り」において感じ学んだことを明らかにしようとした。

2. 研究方法

本研究は、3年課程の看護学生で2006年6月と2007年6月の2年次に小児看護学の講義を履修した学生80名を対象に実施した。

語りの授業は、乳幼児期の子どもを対象として2分間で語れる「お話」を創り、子どもに見立てたクラスの仲間を前にして椅子に腰をかけ語るというものである。学生には、授業を実施する前の時間のコミュニケーションに関する講義の中で30分程度のオリエンテーションを行った。「語り」の授業の学習目的が「ことばに表情をもたせる力をつけよう」であること、お話の内容は、起承転結でまとめるなどドラマ性をもたせることや、説明ではなく子どものことばで話し、感情的なことばを入れる、抑揚をつける、擬態語や擬声語、繰り返しなどを入れるなどのお話を創るポイントについて説明した。授業実施後に、話し手は自己評価および自由記述のレポートを記述すること、また、子どもになって聴く学生は、話し手の学生の評価をすることも伝えた（自己評価および聞き手の評価については本論文では扱わない）。

自由記述のレポートは、自己評価した後、「感じたこと、学んだこと」を10分程度の時間で自由に記述させた。自由記述のレポートは、最小の文脈に区切り類似の文脈をカテゴリに分類し、項目毎の記述率を算出した。

倫理的配慮として、対象学生に研究の趣旨、成績の

評価には無関係、匿名性の保証を口頭で説明し同意を得た。

3. 結果

本研究の対象とした80名全員のデータを分析に用いることができた。レポートから抽出した文脈数の総数は385であった。レポートの記述内容を「語り」実施前・中・後の時間の経過と、「語り」の必要な想像力や感情移入力、表現力を意識し、類似した文脈を「話の創作」「語りを実施しての思い」「仲間の語りを聴いて」「学びと願望」とし4つのカテゴリに分類した。

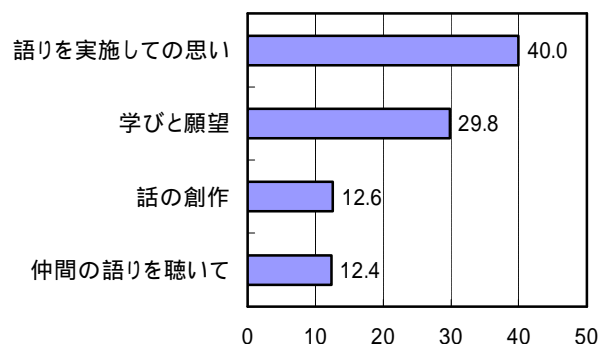


図1 カテゴリの割合 (%) .

4つのカテゴリの中で、最も多くの文脈が分類されたカテゴリは「語りを実施しての思い」で40.0%を示し、次いで「学びと願望」が29.8%、以下、「話の創作」が12.6%、「仲間の語りを聴いて」が12.4%であった(図1)。

表1 カテゴリ「語りを実施しての思い」の内容

内容	具体的記述内容
緊張・難しい・できなかった (83%)	<ul style="list-style-type: none"> 感情を込めるのは難しい。 緊張しすぎてはっきりしゃべれない。 手足が振るえ人の顔をみる余裕がない。 やってみるとすごく難しい。 絵がない分、声音や表情を工夫するよう心がけたがうまくいかなかった。 皆がこちらを向いていると思うと怖くなった。
できた・自信・楽しい (5%)	<ul style="list-style-type: none"> 小さい頃の体験をお話にしたので感情を込めやすかった。 話しているうちに楽しくなった。
その他 (12%)	<ul style="list-style-type: none"> 小さい頃に母親にたくさんの絵本を読んでもらいそれを思い出しながら話した。 何度も練習したけど余裕なかった。 皆が興味を持ってくれるかすごく不安になった。

「語りを実施しての思い」に分類された文脈で、『緊張した』『難しい』『できなかった』内容の文脈が82.4%を占め、具体的には<感情を込めて話すのは難しい><緊張して話のスピードが速くなった>などがあった(表1)。

「学びと願望」では、『感情を込める』『引きつける』が24.3%で最も多く、<子どもを夢中にさせる話し方や感情を込める方法を学びたい><反応を見ながら話すことが大事>があった。『子どもの目線』『子どもの気持ち』は次いで多く5.2%であった(表2)。

「話の創作」では、『難しい』『悩んだ』『大変』が最も多く70.5%で、<自分でお話を考えるのは大変><子どもに伝えたいことが決まってもそれをどのように伝えるか難しい>などがあった。一方、『自信がある』『楽しい』も10.2%みられた(表3)。

表2 カテゴリ「学びと願望」の内容

内 容	具体的記述内容
感情を入れる・引きつける (24%)	<ul style="list-style-type: none"> 感情を込めて声が大きいの幼児を引きつけるのに重要だ。 感情を少し大きめに込めた方が人に気持ち伝わりやすい。 感情を込めるなら、自分自身ももっと感情をだしていかないといけない。 感情移入している人の話は頭の中に残るし聴いているときも話に入り込める。 子どもを夢中にさせる話し方や感情を込める方法を学びたい。
子どもの気持ち・目線 (5%)	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの気持ちを考えて立場に立ってお話ができるようになりたい。 子どもの目線で話すのはすぐにできず、自分が一番ストーリーの中に入り込まないといけない。
その他 (71%)	<ul style="list-style-type: none"> 話の内容を友情や親子愛、協力の大切さなどは幼児の心を豊かにする。 話の内容も大切だが、話し方で聴いている人の集中度が変わる。 いろんなことを感じて欲しいと思いながら話を創ることが大切。 子どもに面白い、興味を持ってもらえるのは子ども自身が体験していることをもとに考えると良い。 絵本を創っている人は想像豊かな人なんだと思った。 頭の中で考えながら聴くので想像力がつく。 とても緊張したがこういう授業とてもいいなと思った。 人の話をよく聴こうとする姿勢になるのでとてもよい。

表3 カテゴリ「話の創作」の内容

内 容	具体的記述内容
難しい・悩んだ・不安 (71%)	<ul style="list-style-type: none"> 聴いている人を引きつける話を作るのは難しい。 言葉だけで子どもが想像する話を作るのは難しい。 ドラマ性を考えるのが難しく苦労した。 子どもに伝えたいことが決まってもそれをどのように伝えるか難しい。 絵もない話をどういふふうにわかりやすく聞かせられるか悩んだ。 内容は決まっても言葉にするのは難しい。 2分間で起承転結を考えるのが難しい。 伝えたいことをどういう風に言えば伝わるのかわからないので苦労した。 難しい言葉を使わず擬音語を入れたりすることが大変だった。 自分の言葉だけでちゃんと伝わるか不安。
自信・楽しい・簡単 (10%)	<ul style="list-style-type: none"> ドラマ性やストーリーには自信がある。 自分でお話を作るのは結構楽しい。 少し教訓も伝えられていい話できた。
その他 (19%)	<ul style="list-style-type: none"> 私だけ死んだというのを入れてよかったのか。 いろいろな方向で考えた。

表4 カテゴリ「仲間の語り」

内 容	具体的記述内容
楽しい・よかった・もっと聴きたい (87%)	<ul style="list-style-type: none"> 皆の話を聴いてわくわくして子どもの頃にもそった気持ちになった。 いろんな話を聴けて楽しかった。 ストーリーもあつて楽しく楽しかった。 抑揚をつけて話している人の話はすごく楽しかった。 皆が夢のあることを考えていると思ううれしくて面白かった。 皆の発表が楽しく思わず話に引き込まれていった。 この授業で皆の新しい一面が見られよかった。
その他 (13%)	<ul style="list-style-type: none"> 絵がないので皆の話がわかりにくいので絵があつたらもっとわかりやすい。 やさしい印象があつて新鮮だった。 しつけの話があつてよいなと思った。 皆の話し方を見習おうと思った。 皆に聞かせるような話し方が懐かしかった。

「仲間の語りを聴いて」では、『おもしろい』『楽しい』『良かった』『もっと聴きたい』『引き込まれた』が87.5%と大多数を占めた(表4)。

4. 考察

本研究は、「語り」の授業により学生の子どもに対するコミュニケーション能力を高めることを目的に、「語り」の授業を実施し、その効果について自由記述のレポートから分析した研究である。特に本研究では、学生の子どもとのコミュニケーションの傾向を捉え、コミュニケーションの過程の「表出」するときに行われる学生の学びに視点をおき、子どもをよく理解する体験の少ない学生が「語り」をすることによって学び得られるものを明らかにしようとした。

自由記述の内容は4つのカテゴリに分類され、最も多くの文脈が分類されたカテゴリが「語りを実施しての思い」で、以下、「学びと願望」、「話の創作」、「仲間の語りを聴いて」であった。この結果は、「語り」の授業を終え、まず、感情面での語りを実施しての思いが表れ、次いで、そこから学ぶもの、そして、感情面から少し離れ、話の創作を考え、最後に、仲間の語りを受け止めようとする、そんな思考プロセスが反映された結果であろう。以下、個々のカテゴリの内容について考察し、最後に全体を総括することにする。

1) 「語りを実施しての思い」について

『難しい』『できない』を示す文脈がほぼ8割を占めたが、予想どおりの結果であった。絵を描けば簡単に伝わることでも、たとえば、「くつした」を言葉だけで説明するのはかなり難しい。そのうえ、対象は乳幼児期の子どもである。乳幼児期の子どもにわかる言葉を選び、子どもを引きつけ感動させるような話し方をみんなの前で自信をもってできるようになるには、とても一回限りの「語り」の授業で達成されるものではないと考えてはいた。実際、学生の記述内容の中には<やってみるとすごく難しい>があり、実際やってみて初めて難しさに気づいたことが伺える。原嶋ら[2]は、絵本作りと学生の前で「絵本」の読み聞かせの体験をさせ、その時の状況や感想を報告している。その報告では、読み聞かせを行った学生の感想は、「満足感と達成感」、および、工夫が必要、緊張した、読み聞かせの難しさなどの「反省、緊張、困難」の内容に分類されている。絵本であっても緊張や難しさがあることがわかる。しかし、絵本は言葉のイメージを絵が助けてくれるが、「語り」はなにもない。自己の「表出」だけである。声という音のみ感じ、語り方次第で感動の伝わり方に差が大きくでること、語り手は、聞き手の目を見ながら語り、聞き手も語り手の方を見る。「語り」は、絵本よりコミュニケーションのより身近なモデルとなると考え、授業に取り入れた。その結果、予想どおり

多くの学生が、『難しい』『できない』と感じた。ただし、「語り」実施後の自己評価の結果は、別に報告するが、自由記述のレポートとは違い、ほぼ9割の学生が「声量があり言葉がはっきりわかる」や、「語りに感情が入っている」と評価し、学生は、できない、難しいと感じながらも達成感や満足感が得られたように思われる。

また、「語りを実施しての思い」の学生の記述内容には、<前をむけなかった><早口になった>など緊張したり恥ずかしいという思いを抱く学生が多く、人の前で話す場に慣れていないことが示され、子どもに対するお話の仕方や説明の仕方を、繰り返しトレーニングする機会を増やす必要性が示唆された。倉田[3]は、小児看護技術教育の演習内容が、旧来の「物品準備や手順の習得」を重視したことから、「子どもへの説明・子どもの反応が捉えられる内容」に変化していると述べている。これらのことより、小児の看護技術演習において、子どもに対するお話や説明の仕方を重視したロールプレイング方式などの演習の重要性が示唆された。

2) 「学びと願望」について

『感情を込める』『引きつける』が高い頻度を示したのは、事前にオリエンテーションで、語りの授業が「ことばに表情をもたせる力をつけよう」という目的であることを示し、話し方のポイントを説明したことが影響を及ぼしたと思われるが、学生が他者を評価する視点を持ちながら真剣に聞き手になり、どのような言葉や話し方、さらにどのような話の内容が人の心を動かすのかまで感じた結果だと思われる。<子どもを夢中にさせる話し方や感情を込める方法を学びたい>という学生の願望も引き出せ、学生の向学心を刺激できたのではないかとと思われる。

3) 「話の創作」については

『難しい』『悩んだ』がほぼ7割あった。事前に伝えておいた課題であったので十分考えて練る時間はあったと思われるが、学生は<子どもに伝えたいことが決まってもそれをどのように伝えるかが難しい>と悩んでいたのかと思われる。お話を伝えるためには、乳幼児期の子どものからだやこころをイメージするところからはじまる。イメージとは、想像力であり、想像力とは、現在そこにはない何かを思い浮かべる能力である。思い浮かべるためには、それまでの経験や知識という記憶がないと想起できない。今回学生は、これまでの経験や知識から乳幼児期の子どもを想像するしがなく、学生のこれまでの生活経験と小児看護学の講義を受けた知識という記憶が重要となった。筒井[4]も子どもに接した経験が少ない学生に、小児看護教育として子どもをイメージできるような講義方法や内容の必要性が求められていると述べている。小児看護において、子どもとの好ましいコミュニケーションを成立

させるためには、小児看護学の講義で子どもをイメージでき対象を理解させる講義の重要性が再確認された。したがって、「語り」の授業の効果を高めるには、事前に学生の乳幼児期の子どもの理解に関するレディネスを把握しておくことが必要かと思われる。今回、乳幼児期の子どもの成長発達の講義は終了していたが、健康な子どもを实践から理解する保育所実習前であったこと、また、お話は2分間で起承転結が明確になるようまとめるなど論理力も要求されたことで、学生はさらに難しく感じたのではないかと思われる。

4) 「仲間の語りを聴いて」について

『もっと聴きたい』『楽しい』『引き込まれた』など仲間の「お話」に感情移入した学生が大多数を占めた。原嶋ら[2]や大澤[5]が行った読み聞かせを受けた聞き手側の感想についての研究結果とほぼ同様の結果となった。本研究では、聞き手である学生に評価基準にそって話し手を評価することを課したが、仲間の語りの場の雰囲気はよく、<皆の発表が楽しく思わず話しに引き込まれていった><この授業で皆の新しい一面が見られよかった>など、ほとんどの学生が集中して「お話」を聴き肯定的に受け止めた結果が出た。また、授業終了後に聞き手側から話し手側へ評価表を手渡すことで、話し手としての能力を他者から評価され、学生は自己を振りかえる貴重な機会となったと思われる。

5) まとめ

本研究結果から、「語り」を体験して、とても難しかったりできなかつたりなどの困難な、あるいは初めての体験に向き合いながら、自己の可能性や能力を試す機会を得た学生は、緊張感や充実感などの高ぶった感情を持ち、その感情の高まりが、授業後すぐの自由記述のレポートに高い頻度で「実施しての思い」となってあらわれたことが推測された。そして、体験後、どうすればよかったのかという学生の問題意識や疑問に結びつき、どのような言葉や話し方、話の内容が良かったのかなどの振り返りが、次の「学びや願望」にあらわれたことが伺えた。その後、「話の創作」や「仲間の語りを聴いて」に続くのは、自己の感情から少しはなれた結果であると思われる。今回、「語り」の授業を体験だけで終わらせず、授業後レポートさせることで、体験後の感情を学びに変えることができたと考え。

絵本という媒体を通して読み聞かせした授業につい

ての報告がなされているが、本研究は、絵本ではなく「語り」の授業についてである。絵本の読み聞かせ以上に、かなり難しい課題だとわかってはじめて授業であったが、学生は多くの学びを得たとともに、<とても緊張したがこういう授業はとていいな><すごく楽しい><もっと上手になりたい>などの声があり、授業の楽しさを実感したり、前向きに取り組もうとする姿勢が認められた。本研究は、学生の子どものコミュニケーションの傾向を捉え、コミュニケーションの過程の「表出」するときに得られる学生の学びに視点をおき、また、子どもをよく理解する体験の少ない学生が「語り」をすることについて考察した研究である。学生の自由記述の中に、<子どもにおもしろい、興味をもってもらえるのは、子ども自身が体験していることを基に考えると良い>があり、子どもという対象を十分理解することが「語り」には必要であることも学んだと思われる。

今回、「語り」の授業を実施し、その結果学生は乳幼児期の子どもをイメージし理解しようとするとともに、子どもに有効に伝える表現の方法を体験から学ぶことができたことを、自由記述のレポートの分析において明らかにすることができた。

引用文献

- [1] 植原 清：言葉・保育士試験の要点と問題（保育問題検討委員会編），大阪教育図書，444-472（2005）
- [2] 原嶋朝子 他：看護学生の絵本作りと読み聞かせの自己評価．看護教育 36，344-346（2005）
- [3] 倉田節子：文献から見た小児看護技術教育の実態．日本赤十字広島看護大学紀要 2，73-81（2002）
- [4] 筒井真優美：21世紀の小児看護における課題．看護展望 27(4)，1（2002）
- [5] 大澤早苗：「絵本の読み聞かせ」を小児看護技術演習に取り入れた有効性．小児看護 36，134-136（2005）

論文集「人と環境」Vol. 1 (2008)
大阪信愛環境総合研究所編集発行
